

表14. 福島事故対応の反省点

- 避難区域の設定や屋内退避の決定などが二転三転し住民の不安と不信を招いた
- 緊急避難となった住民の甲状腺線量測定や安定ヨウ素剤投与もなされなかった—結果的には必要なかったが
- 計画的避難や住民帰還の判断根拠に学問的な誤りがある(当時の線量がその後も一定と仮定、8時間外、16時間屋内と仮定して積算線量を2-3倍過大評価など)、その結果未だに15万人超の住民が避難生活を余儀なくされ災害関連死も1400名を超えた
- 放射線の危険性を煽る報道、インターネット上の種々な不正確な情報、過大すぎる規制値等と、一般国民の過度な放射線恐怖で、被災地とその住民の生活再建が阻害され、現地の農業、林業、漁業に大打撃が及んだ
- 適切な心理社会的支援が少ない
- 専門家が正しい情報を広く周知させる努力、政治力が求められている